シンポジウムにあたって

航海訓練所
教育部長　　菅原　長英

練習船上でのシンポジウムという形で、昨年につづいて神戸大学海事科学部との共催で開催をさせていただきました。

今年のテーマとしては、阪神淡路大震災から１０年を迎えたこともあり、「自然災害と船」ということになっております。昨年は多くの大災害が発生し、自然災害の恐ろしさを改めて知らされており、適時のテーマであると思います。

当時、私は陸上勤務をしていたのですが、教育現場の査察があり、所長の随行官として大成丸に乗船しておりました。船が神戸港に向けて航海中で、友ケ島水道を抜け、大阪湾に入ったころだと思いますが、小用でトイレに立っていた時、下から突き上げるような激しい振動が続き、大変なことが起こったことを感じました。エンジニアである私は、大成丸がタービン船であったことから、減速装置が損傷したのではないかと思いましたが、しばらくすると静かになり、エンジン音も聞こえてきました。何が起こったのかは後刻テレビで知った訳ですが、神戸沖に近づくと、街の各所から煙が上がっており、まるで戦争の空襲にでも遭ったかのような光景でした。後で聞いた話ですが、船長経験者は座礁したと思い、船乗りでない随行官は地震だと思ったそうです。職業により感じ方が違うものだと思いました。神戸沖に錨を入れて、泊まっている間にも何回も余震を感じました。神戸港には近づけず、大阪沖からボートで天保山岸壁に上陸をし、帰って来ました。

航海訓練所として行った救援活動については、このあと報告がありますが、当時、遠洋航海を間近にしていた３隻をのぞいて、内地航海中の３隻が行動予定を変更して順次救援活動を行っております。練習船には大勢の実習生・乗組員が乗っているため、船の持っている機能を十分に発揮できなかったこともあったかと思いますが、宿泊所を確保された者の行動という強みがありました。

昨年末のインド洋大津波においても同様でしたが、陸上の道路や鉄道が寸断されると、人の移動や救援物資の補給などは、海と空しかできなくなります。災害発生時、船に期待される役割も大きいものがあります。今日これから講演される内容を楽しみに聞かせていただきます。

また、神戸大学海事科学部との共催での船上シンポジウムを来年以降もぜひ続けていけるよう希望しております。